

久世切の本文

——抄出本『萬葉集』の基礎的研究のために——

景井 詳 雅

要 旨

平安時代には『萬葉集』を抄出した抄出本が存在し、萬葉歌享受において重要な位置を占めていたと考えられるのだが、古筆切のみの現存であるためその実態は不明な点が多い。そこで、抄出本『萬葉集』の古筆切の一つ久世切の本文を考察し、その性格の一端を明らかにすることを目的としたのが本稿である。

久世切に見える抄出本『萬葉集』は、『萬葉集』の歌順に従って歌を抄出・配列し、歌は仮名でそれ以外の内容は漢字で表記する。その内容は概ね『萬葉集』と対応するが、『萬葉集』の左注や作者名の文言の簡略化、作者名の位置変更、巻に関する表示がないことが確認される。そして、久世切は写本と考えられるため、これらの変容は書承の際に生じたとも考えられる。

ただし、以上の変容は平安和歌のありように通じ、他の抄出本『萬葉集』や『萬葉集』を意義分類した類聚古集にも見えることをふまえると、抄出本作成の際に『萬葉集』の内容を変質化しない程度で変更されたものと考えられる。つまり、久世切に見える抄出本『萬葉集』は、『萬葉集』の縮小化を意図した抄出本であり、『萬葉集』に従うことが原則であったと考えられる。その一方で、久世切には、現存の『萬葉集』の縮小化を意図した抄出本であり、『萬葉集』に従うことが原則であったと考えられる。異なる本文も認められる。久世切に見える抄出本『萬葉集』が現存の『萬葉集』伝本とは異なる場で成立した可能性を視野に入れておくべきであろう。

『萬葉集』は約四五〇〇首にのぼる歌を収載し、すべての内容を漢字で表記する。その成立は最終的には天平宝字三（七五九）年以後、奈良時代末期と考えられている。『萬葉集』は平安時代以後も様々な歌書にその名、その歌が見え、その後の和歌文学に大きな影響を与えてきたことは疑いない。ただし、平安時代以後、漢字に代わる新しい日本語表記である仮名が生まれ、和歌は仮名で表記されることが一般的になった。その時代の人々から見れば、『萬葉集』はその規模、表記において明らかに異彩を放っていたと想像される。そのこともあつてか、平安時代以後、『萬葉集』そのものを享受することとは別に、『萬葉集』を元にした新たなテキストが生み出され、享受されていく。

ところで、現存する『萬葉集』伝本で後人の手が加わっていない状態のテキスト、すなわち原本は現存しない。現存する『萬葉集』伝本はすべて、真名本文で記された歌に仮名でよみを加えた付訓本といわれるものである。付訓本は『萬葉集』の内容を保持したまま享受することを基本とするテキストであり、平安時代でも、全巻揃いではないが、桂本、藍紙本、元暦校本、金沢本、天治本など複数のテキストの存在が確認されている。

一方、付訓本とは別に、『萬葉集』の真名本文の歌を仮名で示したテキスト、いわゆる仮名本が存在していたことが確認されている。現在、『萬葉集』のすべての歌を仮名で示したテキストは確認されておらず、抄出本のみが認められる。平安時代では『人麿集』『赤人集』『家持集』といった私家集を始め、当時成立した歌書に見える萬葉歌の中にも抄出本『萬葉集』の利用が考えられているものがある。けれども、平安時代の実際の抄出本『萬葉集』は古筆切が現存するのみで、その数もきわめて少ない。平安時代の萬葉歌享受において、抄出本『萬葉集』は重要な位置を占めて

いたと考えられるけれども、その実際の姿はよく分かっていない。

そこで、本稿では、実態の見えにくい抄出本『萬葉集』について、現存する古筆切の本文からその性格の一端を明らかにすることを目的とする。現在、平安時代の抄出本『萬葉集』の古筆切は数種確認されているが、そのうちの一つ、久世切の本文を検討する。久世切は抄出本『萬葉集』の古筆切の中でも比較的多く現存し、近年田中大士氏の調査により新たに四葉が見出された。久世切本文の考察は、抄出本ひいては仮名本『萬葉集』の実態の具体化や校勘資料としての有用性に留まらず、平安時代の萬葉歌享受の内実を明らかにしていく上で重要な意味を持つと考えている。

二、久世切について

久世切については、小松茂美氏が『古筆学大成』で書誌的な観点から詳細に論じている。以下、小松氏の久世切に関する見解を要約すると、久世切は『古筆名葉集』の世尊寺伊経の項目に見える「巻物切 万葉サラサ地」にあたり、五十年後に『古筆名葉集』を増補した『新撰古筆名葉集』の同じ項目に「久世切 四半 立長 歌三行書 更紗地」とその名が見える。芳香と装飾を兼ねて、丁字の花を煮沸して採った染料を紙の表面に吹き付けた装飾料紙に本文を書き記す。筆跡は藤原伊経の遺墨が残らないため判断できないが、書写年代はおよそ十一世紀後半ごろで、『萬葉集』を抄出し一巻の卷子本に調度本として揮毫されたものが久世切であると推定している。

さて、久世切は『古筆学大成』の時点では六葉が知られていたが、前述したように、田中氏によつて四葉が新たに見出された。そこで、『古筆学大成』に示されている本文に新たな四葉を加え、現在までに稿者が確認し得た久世切の本文をすべて翻刻で示しておく。⁽¹⁾

【伝藤原伊経筆万葉集抄切】（久世切）

① 右一首出柿本人丸集

わかせこそをきこせのやまとひと

はいへときみもきまさすやま

のなゝらし

詠河

おほきみのみかさのやまの

（7 一〇九七）

② おひにせるほそたにかはのお

とのさやけさ

③ 右柿本朝臣人丸集

寄草

やまたかみゆふひかくれぬあさ

ちはらのちみむためにし

めゆはましを

みしまえのたまえのこもを

しめしよりおのかとそおも

（7 一三四八）

★⑦ 海邊望月作

土師稻足

かんさふるあらつのさきのよす

るなみまなくやいもにこひわ

たりなむ

むこのうみにはよくあらし

いさりするあまのつりふねな

みのうへに見ゆ

柿本人丸哥云かりこも

のみたれてゝ見ゆあまの

■■■■

★⑧ 死相敵於是娘子戯歎曰自古

来今未聞未見一女之身性適二

門其方今壮士之意有難和平不

如妾死相□永且而乃尋入林中

懸樹経死□両壮士不堪哀働

（16 三七八六）

ふいまたからねと

★④ 岡本宮御宇天皇幸紀伊國

時哥

あさきりにひちにしこゝろも (9 一六六六)

ほさすしてひとりやきみか

やまちこゆ覽

右一首作者未審

⑤ 愴作哥

しかのあまのひとひもおちす (15 三六五二)

やくしほのからきこひをも

われはするかな

⑥ 幸芳野離宮時哥

たきのうへのみふねのやまの (9 一七一三)

あきつへにきなきわたるはたか

こよひとり

兼泣漣襟各陳心緒作哥

★⑨ 欲親令知因作哥詠遣其夫哥

したにのみこふれはくるし (16 三八〇三)

やまのはにいてくるつきのあ

らはれはいかに

⑩ 豊後國白水郎哥

くれなゐにそめてしこゝろ (16 三八七七)

もあめふりてにほひはす

ともうつろはむやも

天平十八年八月七日夜集平 (17 三九四三)

越中守大伴宿祢家持館宴哥

史生土師 (17 三九五五)

★④ 個人蔵

★⑦ 個人蔵

★⑧ 文化庁所蔵古筆手鑑

★⑨ 『古典籍下見展観大入札会目録』(昭和六十一年)

※①～⑩の通し番号及び『萬葉集』の巻・歌番号は稿者による。また、「■」は文字は確認できるが判読できないことを、「□」は文字がなく空白であることを示す。なお、★をつけた四葉が田中氏によって見出された久世切で、それ以外は『古筆学大成』による。

久世切本文の性格を考察する前に、古筆切自体について一点だけ述べておく。それは久世切⑤⑥のことで、これらは本来それぞれ別の切であり、それを継ぎ合わせて一幅の掛け物にしたのが現状の体裁であることを小松氏が述べている。したがって、現状の体裁が久世切本来の姿ではないことを断っておく。

三、久世切の基本的性格

では、久世切について、基本的な事柄を二点確認することから始めたい。それは、歌書としての性格と、テキストとしての性格である。最初に、久世切に見える抄出本『萬葉集』とはどういう内容なのか、次に掲げる久世切①②から具体的に見ていくことにする（なお、下段に示す『萬葉集』伝本の本文の字配りは伝本どおりではない。以下同じ）。

〔久世切①②〕

右一首出柿本人丸集

わかせこをきこせのやまとひと
はいへときみもきまさすやま
のなゝらし

詠河

〔萬葉集卷七（二〇九七・一一〇二）・元暦校本・平安時代後期写〕

右三首柿本朝臣人麿之歌集出（二〇九二～一〇九四左注）

吾勢子乎乞許世山登人者雖云君毛不来益山之名尔有之
わかせこをちこせの山とひとはいへときみもニシまさすやまのなゝシらし

詠河（二一〇〇ニアル題詞（二一一五マデカカル））

おほきみのみかさのやまの

おひにせるほそたにかはのお

とのさやけさ

大王之御笠山之帯尔為流細谷川之音乃清也

おほきみのみかさの山のおひにせるほそたにかはのおとのさやけさ

(なお、本文の傍記はとくに断らない限り墨である。以下同じ)

まず、久世切①②には萬葉歌が平仮名で記されている。『萬葉集』で確認すると、最初の歌は一〇九七歌に、次の歌は五首とんで一一〇二歌に該当する。つまり、抄出した萬葉歌を『萬葉集』と同じ歌順で配列している。

次に、久世切①に「詠河」が見えるが、これは『萬葉集』の題詞と対応する(以下、本稿では久世切に見える『萬葉集』の題詞に相当するものを、平安和歌での呼称に合わせ「詞書」と称する)。この「詠河」は『萬葉集』では一一〇〇歌の右隣にある。久世切では一一〇〇、一一〇一歌が収載されなかったため、「詠河」は一一〇二「おほきみの」歌の右隣に記されていることになる。これも『萬葉集』と対応する。なお、久世切①の詞書は歌本文の書き出し位置からおよそ二字ほど下げて記されている。

そして、久世切①に見える左注「右一首出柿本人丸集」は詞書よりも低い位置に記されているが、これは『萬葉集』巻七に散見する左注「右○首柿本朝臣人麻呂之歌集出」と対応する。この左注の前は切られて現存しないため左注のかかる歌は判然としないが、「わかせこを」歌の前に「詠山」の詞書がないことをふまえると、題詞「詠山」と左注「右三首」の両方がかかる一〇九二、一〇九三、一〇九四歌のうち一首が「詠山」の詞書とともにこの左注の前にあることが推測される。そうすると、久世切①の「右一首」は抄出した歌数に合わせて数を変更していることになる。なお、久世切①の左注は「出」の位置、「朝臣」の有無、「人丸」の表記が『萬葉集』とは異なる。

久世切①②からうかがえることをまとめると、『萬葉集』中から歌を抄出、仮名書きし『萬葉集』に従って歌を配列する。歌に関連する題詞や左注も取り上げそれらは漢字で記す。このありようはおおむね他の久世切にも当てはまる。

久世切に見える抄出本『萬葉集』は『萬葉集』の内容がかなり意識されていると考えてよい。ただし、久世切が抄出部分のすべてを『萬葉集』どおりに書き記していないことも久世切①の左注の書き方から見てとれ、こういったあり方は他の久世切にも認められる。そこで、久世切⑩を中心にもう少しそのありようを見ておくことにしたい。

〔久世切⑩〕

豊後國白水郎哥

くれなゐにそめてしこゝろ

もあめふりてにほひはす

ともうつろはむやも

天平十八年八月七日夜集乎

越中守大伴宿祢家持館宴哥

史生土師

〔萬葉集卷十六（三八七七）・尼崎本・平安時代後期写〕

豊後國白水郎歌一首

紅尔染而之衣雨零而尔保比波雖為移波来也毛

くれなゐにしみにしソメテシころもあめふりてにほひはすともうつろはめやも

〔萬葉集卷十七（三九五五）・元暦校本〕

八月七日夜集于守大伴宿祢家持館宴歌（三九四三ニアル題詞）

奴婆多麻乃欲波布氣奴良之多末久之氣敷多我美夜麻尔月加多夫伎奴

ぬはたまのよはふけぬらしたまくしけふたかみやまにつきかたふきぬ

右一首史生土師宿祢道良

久世切⑩には『萬葉集』と異なる部分がいくつか認められる。まず目を引くのが、卷十六と卷十七の境目に「卷第十七」といった巻が記されておらず、巻の境目を示す空白も見えないことである。『萬葉集』では必ず冒頭に巻が記される。巻を示さない、巻の境目を表示しないあり方は明らかに『萬葉集』からの変容と考えられる。なお、この点はすでに久曾神昇氏が指摘している。⁽²⁾

次に、久世切⑩には卷十六、卷十七の歌とそれに関連する詞書と作者名が見える。そのうち、卷十六の詞書は末尾の「一首」が見えないこと以外は『萬葉集』の題詞と対応し差異は小さい。ところが、卷十七では、久世切⑩の詞書

「天平十八年八月七日夜集乎越中守大伴宿祿家持館宴哥」に見える「天平十八年」「越中」が、対応するはずの『萬葉集』巻十七・三九四三歌の題詞に認められない。この異なりについては小松氏の指摘がある。小松氏は、久世切⑩の詞書がこれより前にある題詞「天平十八年正月白雪多零積地數寸也」（三九二二）、「平群氏女郎贈越中守大伴宿祿家持歌十二首（三九三一）」（傍線は稿者。以下同じ）を三九四三歌の題詞に合成し、抄出本を作成する際に生じる情報の漏れを補った内容であると述べる。小松氏の見解は首肯される。久世切⑩には、久世切①の左注に見えた数の変更と同じく、『萬葉集』の内容を把握した上での本文の変更という『萬葉集』に対応した変容が認められる。

ところが、久世切⑩に見える「史生土師」はこの題詞とは性格が異なる。これは『萬葉集』巻十七・三九五五歌の作者「右一首史生土師宿祿道良」と対応するが、久世切⑩では「右一首」と「宿祿道良」が見えない。「宿祿道良」は作者の姓・名であるため書かれていないとは考えにくいのだが、「史生土師」の下の余白の存在を考えると書き記されなかったことが考えられよう。そうすると、「史生土師」には作者名の省略がなされていると考えられ、久世切①⑦の類例ということになる（「右一首出柿本人丸集（①）」「柿本人丸哥云（⑦）」）。また、この「史生土師」の次は切られているが、『萬葉集』から推すに三九五五歌があったと考えられる。つまり、「史生土師」は三九五五歌の右下方に記されている。『萬葉集』では当該歌の左に作者名を「右一首」と左注として記すから、久世切⑩の作者名は『萬葉集』と位置が異なることになる。これも久世切⑦の「土師稻足」に同様の例が見える。

このように、久世切には「抄出に伴う内容変化の補正」「巻数及び巻の境目を示さない」「文言の省略、簡略化」「作者名の位置変更」と、以上四点の『萬葉集』からの変容が挙げられる。そして、このうち「抄出に伴う内容変化の補正」は『萬葉集』の内容が意識された変容であるため、抄出本作成の際の改変と考えられるけれども、他の三点については『萬葉集』からの乖離であるから、書承の過程でも起こりえる。では、久世切は抄出本『萬葉集』の原本なの

か、それとも写本なのか。久世切のテキストの性格については次の久世切⑧に具体的に表れている。

〔久世切⑧〕

死相敵於是娘子戲歎曰從古
 來今未聞未見一女之身往適二
 門其方今壯士之意有難和乎不
 如妾死相□永且而乃尋入林中
 懸樹絳死□兩壯士不堪哀慟
 兼泣漣襟各陳心緒作哥

〔萬葉集卷十六（三七八六）・尼崎本〕

（昔者娘子字曰櫻兒也于時有^二壯士^一共誂此娘而捐生格競貪）死相敵於是
 娘子戲歎曰從古來今未聞未見一女之身往適二門矣方今壯士之意有難和
 平不如妾死相^害永息尔乃尋入林中懸樹絳死^其兩壯士不敢哀慟血泣漣襟
 各陳心緒作歌二首

（尼崎本にある朱の訓点は省略した。また、括弧は久世切⑧に見えない部分、本文の文字囲いは久世切の「□」に該当する箇所、[Ⓐ]）
 〽[Ⓔ]は尼崎本と久世切で本文が異なる部分を示す）

久世切⑧には卷十六の巻頭歌の題詞が記されている。この題詞は、櫻兒が二人の男性に求婚され、身の処遇に悩んだ櫻兒が自殺し、その死を悲しんだ男二人が歌を詠んだ旨を記したかなり長いものである。下に尼崎本を示したが、両者を比較すると、久世切⑧には題詞の後半三分の二がほぼ『萬葉集』どおり認められる。前半三分の一も『萬葉集』どおりに存在したと考えてよく、長い漢文の題詞を収載する点に『萬葉集』への関心の高さを認めてよいだろう。

ところが、久世切⑧には尼崎本との本文の異なりが六箇所（[Ⓐ]〽[Ⓔ]）認められる。しかも、両者の漢字を比較すると字形は似ているものの、その文意は[Ⓐ]〽[Ⓔ]のうち[Ⓔ]は可能かもしれないが[Ⓐ][Ⓑ][Ⓒ][Ⓓ][Ⓕ]はかなり取りづらい。したがって、これらの本文の異なりは字形の類似による誤字と考えられる。また、久世切⑧の本文には空白（□）が二箇所認められる。尼崎本と比較すると、その空白は「害」「其」（傍線部）の二字があるべき箇所にあたるため、この空白は欠字を示していると考えられる。なお、当該本文に見える尼崎本との異なりは久世切独自のもので、尼崎本以外の『萬

葉集』伝本（廣瀬本、仙覚本）にも類似する例は認められない。そうすると、久世切⑧の㉔㉕の誤字及び二箇所の欠字は『萬葉集』と直接関わる抄出本作成の際に生じたものではなく、抄出本『萬葉集』の書承の過程で生じた本文と考えられる。

ただし、この誤写や欠字が久世切成立の際に生じたとは考えにくい。小松氏は久世切を調度本として揮毫された一巻の歌書と推定する。小松氏のこの見解に従えば、久世切は美麗さを心がけた丁寧な書写がなされていることが想定される。そして、久世切⑧の欠字を表す空白の存在から、その意識が底本の対応にも及んでいることが推測されよう。久世切自身は底本をかなり正確に書写していることが想定され、そういう意味において、久世切は抄出本『萬葉集』の姿やその原拠である『萬葉集』を探る上での好資料と考えられるのだが、それと同時に、書承の過程で生じた本文の乱れも書き留めた写本であることは留意される必要がある。

そして、久世切が抄出本『萬葉集』の写本であることは、その本文をめぐって一考を要する。前述したように、久世切には『萬葉集』からの変容が四点認められるのだが、そのうち、抄出本の作成に伴う変容と考えてよいのは「抄出に伴う内容変化の補正」のみであり、他の三点については久世切が写本であることをふまえると、書承の際の変容とも考えられるからである。

四、平安和歌との関連性

『萬葉集』では作者名を記す場合、「右」と左注として記すか、もしくは題詞に記すかのいずれかがほとんどで、久世切⑦⑩に見える作者名の書き方はまれである。その一方で、平安時代では『古今和歌集』を始め、作者名は歌の

右下方に記すのが一般的である。つまり、久世切⑦⑩の作者名には平安和歌の書き方が反映されていることが考えられる。同様に、久世切①⑦⑩に見える文言の省略、簡略化も平安時代の歌書に比較的好く見られる。例えば、藤原公任撰『拾遺抄』では「判官久米朝臣廣繩（19四二〇三）」を「久米廣繩（春63）」とし、「大宰大監大伴宿祢百代（四五六〇）」を「大宰監大伴百世（恋上251）」とする例が見える。また、久世切①③⑦に見える「人丸」の表記は平安時代の歌書の多くに認められるところである。このような平安時代の歌書に見える書きぶりから考えると、久世切①③⑦⑩に見える左注や作者名の書き方には平安和歌の影響が認められると考えてよい。

ところで、このようなありようは現存する抄出本『萬葉集』の一つである下絵萬葉集抄切にも認められる。下絵萬葉集抄切は伝藤原佐理筆、もしくは小野道風筆とされるが、当人達の筆跡ではないと考えられている。その成立は十世紀後半ごろとする説がある（小松氏）一方で、平安時代後期あるいは鎌倉時代とする説もある（『日本古典籍書誌学辞典』竹下豊氏執筆）。成立年代の判断が難しい古筆切と思われるが、その判断の難しさには下絵萬葉集抄切がわずか三葉しか現存しないことが大きく影響しているよう。その下絵萬葉集抄切の一葉には次の本文が認められる。

〔伝藤原佐理筆下絵萬葉集抄切〕

〔萬葉集卷十九（四二七四）・元暦校本〕

新嘗会肆宴應製歌

廿五日新嘗會肆宴應 詔歌六首（四二七三二）アル題詞）

式部卿年足

天尔波母五百都繩波布万代尔國所知牟等五百都リナ波布

似古歌而未詳

天にはもいほつゝなはふ

あめにはもいほつゝなはふよろつよにくにさかえむといほつゝなはふ

万季にくにしらせ

右一首式部卿石川年足朝臣

といほつゝなはふ

下絵萬葉集抄切は久世切と同様に題詞・作者名を漢字で、萬葉歌を仮名で表記する。また、「右一首」と左注に記さ

れた「式部卿石川年足朝臣」がいくぶん省略されて歌の右下方に記される。下絵萬葉集抄切と久世切との関係はお互いに現存する数が少ないため判然としないが、両者に同様のありようが認められることは注意されてよい。⁽³⁾

また、平安時代後期の歌人、漢学者である藤原敦隆による類聚古集も注意される。類聚古集は『萬葉集』を一度解体し、萬葉歌を短歌・旋頭歌・長歌に分け、それらを四季・天地・山水等に意義分類した歌書である。つまり、類聚古集は抄出本『萬葉集』ではないけれども、『萬葉集』を改編する点で抄出本『萬葉集』と同じく編纂者の手が加わった歌書である。その類聚古集には「柿本朝臣人麻呂之歌集」を「人麿集」「人丸集」と文言を省略しつつ当代的に表記する例が見える他、次例のように左注の作者名を簡略化しその位置を歌の右下方に変更する例も複数認められる。

〔類聚古集卷十二（二五一〇）〕

大監物三形王之宅宴歌

兵衛大輔家持

廿宇都里由久時見其登尔許己呂伊多久

牟可之能比等之於毛保由流加母

うつりゆくときみることにこゝろいたく

むかしの人しおもゆるかも

〔萬葉集卷二十（四四八三）・元曆校本〕

勝寶九歳六月廿三日於大監物三形王之宅宴歌一首

宇都里由久時見其登尔許己呂伊多久牟可之能比等之於毛保由流加母

うつりゆくときみることにこゝろいたくむかしのひとしおもほゆる

かも

右兵衛大輔伴宿祿家持作

下絵萬葉集抄切にせよ、類聚古集にせよ、『萬葉集』の内容に手を加えることで成立した新たな歌書である。これらの歌書に、久世切と同じ『萬葉集』の内容を保持しつつも当代的な表記へと変容しているあり方が認められることは、久世切に見える抄出本『萬葉集』の生成を考える上で看過できない事柄である。⁽⁴⁾つまり、久世切もまた、これらの歌書と同じ方向性をもって編まれたと考えて大過ないと考える。ただし、久世切では「柿本（朝臣）人丸集」（久世切①

③を「柿本」人丸」と、「作者未審」（久世切④）を「誦人不知（よみ人しらず）」と改めた上で歌の右下方へ作者名として記すことは認められない。数が少ないため断定はできないが、歌の右下方に移動させることは、明確に作者名のみを記した左注に限定されるのではないかと想像される。

では、巻の表示・区切りについてはどうであろうか。ここでは高城氏によって新たに見出された藤原伊房筆萬葉集抄切（以下「伊房切」と称する）と称される古筆切について触れておきたい。伊房切は高城氏が藤原伊房の若書きと認定する抄出本『萬葉集』の古筆切で、その体裁は冊子本で歌本文は二行書きと、卷子本・三行書きの久世切とは異なる。けれども、高城氏及び田中氏は伊房切が抄出本『萬葉集』と考えられると同時に、その内容から久世切と同系統と想定されることを述べている（注1論文）。両者の関係はさらに検討されるべきことではあるが、ともあれ、伊房切は久世切と相当近い時期に書写された抄出本『萬葉集』であることにはかわりはない。その伊房切の一葉に、別のページの文字が写つていることが高城氏、田中氏により指摘されている。その本文が久世切を考える上で注意される。

〔藤原伊房筆萬葉集抄切〕（本文は『汲古』51号による）

ことしけきさとにすますはけさなきし（8一五一一）

かりにたくひてゆかましものを

泉河邊間人宿祢作哥

かはのせにうつまくみればた□もかも（9一六八五）

ちりみたれたるかはのつねかも

岡本宮御宇天皇□□紀伊國哥

（9一六六五題詞）

写っている本文は巻八、巻九の一部である。伊房切には「巻第九」という巻の表示がなく、巻八と巻九の境目を示

す空白も見られないという、久世切と同様のありようが認められる。久世切に見える抄出本『萬葉集』には抄出本作成の時点から巻に関連する表示がなかったことが考えられよう。なお、久世切が巻の区分を設けないことについて、久曾神氏は後考を待つとしながらも、『萬葉集』を大幅に縮小した抄出本を想定している(注2論文)。稿者も同様の見解で、久世切に見える抄出本『萬葉集』とは、『萬葉集』全体から歌を抄出した一巻の小規模の萬葉歌撰集ではなかったかと想像する。

五、久世切の特異な性格

久世切に見える抄出本『萬葉集』は、『萬葉集』の内容に従いつつも当代的な判断や感覚に応じて変えられた部分のある姿が原本であると考えられる。そして、この変容は久世切に限った現象ではないことも前章で確認された。ところが、久世切には今まで確認してきた変容とは別の特異なありようが認められる。

〔久世切⑦〕

海邊望月作

土師稻足

かんさふるあらつのさきのよす
るなみまなくやいものにこひわ
たりなむ
むこのうみにはよくあらし

〔萬葉集卷十五(三六六〇)・廣瀨本・近世書写(定家本)〕

海邊望月作歌九首(三六五九ニアル題詞)

可牟佐夫流安良都能左伎尔与須流奈美麻奈久也伊毛尔故非和多里奈牟
カムサフルアラツノサキニヨスルナミマナクヤイモノニコヒワタリナム
右一首大師稻足

〔萬葉集卷十五(三六〇九)・廣瀨本〕

當所誦詠古歌(三六〇二ニアル題詞(三六一〇マデカカル))

いさりするあまのつりふねな
みのうへに見ゆ

柿本人丸哥云かりこも

のみたれてゝ見ゆあまの



武庫能宇美能尔波余久安良之伊射里須流安麻能都里船奈美能宇倍由見由
ムコノウミノニハヨリアラシイサリスルアマノツリフネナミノウヘニミユ

柿本朝臣人麿歌曰氣比乃宇美能又曰可里許毛能美太礼互出見由

安麻能都里船

久世切⑦には「むこのうみ」歌の左に「柿本人丸哥云」と異伝本文を記す。平安時代の歌書に見える萬葉歌では異伝本文が一首立てで示されていることが散見するが、久世切⑦のように異伝本文を併記する例は珍しく、管見の範囲では『人麿集』の「類本上巻と三類本のみである。こういう点も久世切に見える抄出本『萬葉集』が『萬葉集』を強く意識している一例と認めることができよう。ところが、久世切⑦には『萬葉集』と異なる部分が三点認められる。まず、「かんさふる」歌と「むこのうみ」歌の順序が『萬葉集』と逆である。次に、「むこのうみ」歌は『萬葉集』では卷十五・三六〇九歌に該当し「當所誦詠古歌」の題詞がかかるのだが、その題詞が久世切⑦には認められない。そして、「むこのうみ」歌に併記された異伝本文には『萬葉集』に見える「氣比乃宇美能又曰」が見られない。

抄出本『萬葉集』の歌順が『萬葉集』と異なることは前述の下絵萬葉集抄切や伊房切にも見える。ただし、これらの古筆切では歌順が『萬葉集』と異なると同時に歌に伴う題詞も記されている。ところが、久世切⑦の「むこのうみ」歌には詞書がなく左注の異伝本文も本文を一部欠き、その性格は明らかに異なる。そうすると、三節の久世切⑧に誤字・欠字といった本文の変容が認められることをふまえ、久世切⑦も本文の乱れを示していることが考えられよう。つまり、久世切⑦は「むこのうみ」歌か「かんさふる」歌のいずれかが混入した状態であることが考えられる。

ところで、久世切には卷十五の歌がもう一首ある。それは久世切⑤の「しかのあまの」歌で、『萬葉集』では三六五

二歌に該当する。その位置は『萬葉集』に従えば久世切⑦の「かんさふる」歌（三六六〇）に相当近い。また、「かんさふる」歌については『萬葉集』の題詞に対応する詞書が存在し、左注の位置変更も抄出本成立時の現象と考えられるため、その本文に問題は認められない。そうすると、久世切⑤と⑦は相当近い位置で「⑤↓⑦」の順序で並んでいることが考えられ、「かんさふる」歌よりも「むこのうみ」（三六〇九）歌の方に動きがあったと推測される。つまり、久世切⑤⑦より前にある「むこのうみ」歌が「かんさふる」歌の後ろに誤って書写されたことが想定される（例えば、底本が卷子本であればこの時点で巻き戻ってしまった、冊子本であればページが戻ってしまったのをそのまま写してしまつたなど。いずれにせよ、この場合、「むこのうみ」歌が重複している可能性が想定される）。ただし、久世切⑦の前後の古筆切が明らかでないため断定はできない。⁽⁶⁾ 本稿では久世切⑦のありようが誤写によると考えられることを指摘するに留めておく。

久世切⑦には書写上の問題から特異なありようが生じたことが想定されるのだが、次に示す久世切①③④に見える特異性はその位置づけが難しい。それは左注の位置がかなり低いことである。

〔久世切①〕（71097・1102）

右一首出柿本人丸集

わかせこをきこせのやまとひと
はいへときみもきまさすやま
のなゝらし

詠河

おほきみのみかさのやまの

〔久世切③部分〕（71342）

右柿本朝臣人丸集
出

寄草

やまたかみゆふひかくれぬあさ
ちはらのちみむためにし
めゆはましを

〔久世切④〕（91666）

岡本宮御宇天皇幸紀伊國

時哥

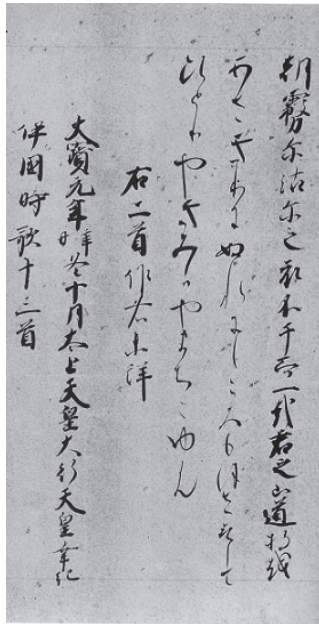
あさきりにひちにしこゝろも
ほさすしてひとりやきみか
やまちこゆ覽

右一首作者未審

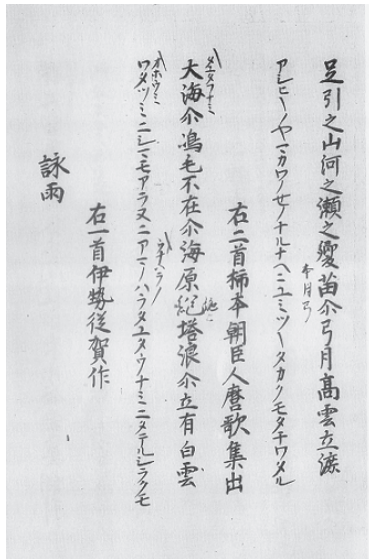
左注の位置の低さが明確に分かるのが久世切④であるが、その左注は題詞の書き出し位置からかなり下方に記されている。久世切①も同様とみてよい。また、久世切③ではさほど長くなく左注であるのに、左注末尾の「出」が次の下方に記されている。つまり、この三例の左注は下に合わせて記されたと考えられ、久世切③の「出」は、下に合わせることを意識しすぎ、書き出しの位置を低くし過ぎたために生じたことが考えられる。

このような久世切①③④のありように対して、現存の『萬葉集』伝本では次のようなあり方がほとんどである。

〔藍紙本卷九〕



〔廣瀨本卷七〕

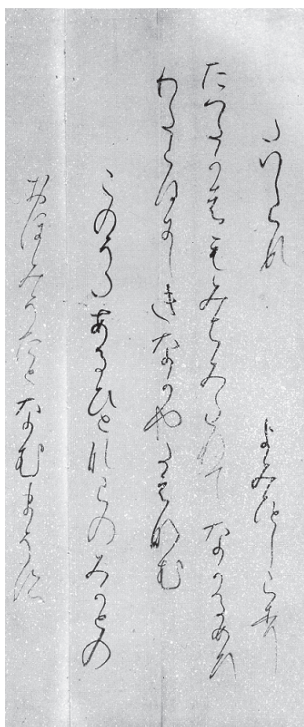


ここでは藍紙本と廣瀨本の二種の『萬葉集』伝本を示したが、久世切との違いは明らかである。現存の『萬葉集』伝本では左注の書き出し位置が題詞より一、二字程低い場合が多く、左注本文の下に余白のある場合がほとんどである。廣瀨本の左注は藍紙本に比べて低い位置にあるが、これは廣瀨本の題詞の位置が低くその題詞に合わせて左注を記したためと考えられる。このように、現存の『萬葉集』伝本には題詞に合わせて左注を記していると考えられる場

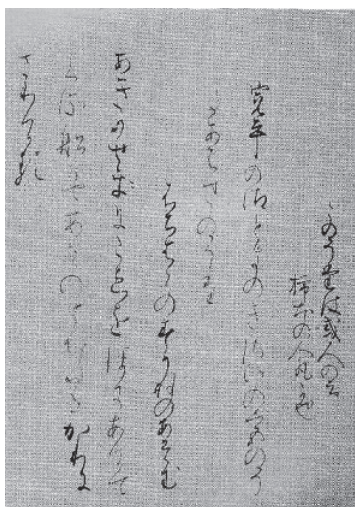
合が多く認められる。

では、久世切の左注の位置は平安和歌に通じる性格なのであろうか。左注を記す平安時代の歌書の一つである『古今和歌集』を見てみることにする。

〔高野切第二種〕



〔関戸本古今和歌集〕

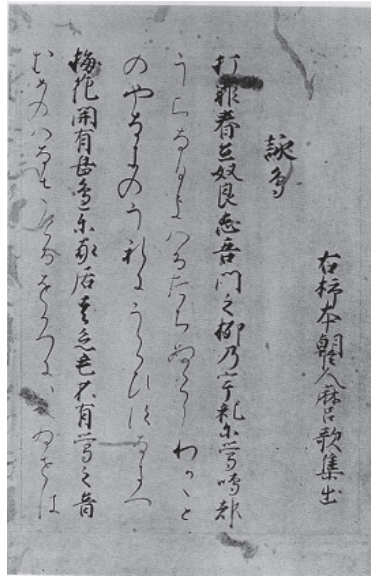


『古今和歌集』の左注は後人の増補と考えられており、そうであれば左注の書き方は成立時には含まれていなかったと考えられる。それでも『古今和歌集』は左注のある数少ない平安時代の歌書である。また、伝本も多数現存し、平安和歌における左注のあり方を見る上で有効な資料といえよう。その『古今和歌集』の伝本に見られる左注は、高野切第二種のように詞書の書き出し位置から一字程度下げたところ、もしくは詞書と同じ位置から記されることが多い。管見の範囲では、関戸本に作者名の左注を作者名と同じ低い位置に記す例が見え、また、古谷稔氏は、関戸本の特徴として歌、詞書、左注の順で字を下げて書くことを挙げている(『日本名筆選19 関戸本古今集』解説)。ただし、

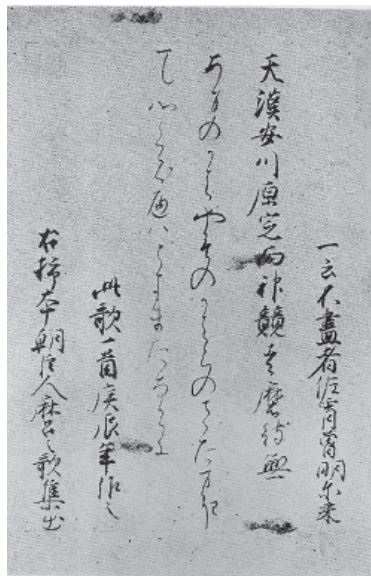
関戸本のありようも伝本内で統一された書き方とはいいがたく例外が存在し、また、関戸本の書き方は下方に合わせ
て書くスタイルというより、単純に書く位置を下げていると思われるありようである。

ところで、現存する『萬葉集』伝本の中で、元暦校本の巻十にだけ久世切とよく似た書き方が認められる。

〔元暦校本巻十①〕



〔元暦校本巻十②〕



元暦校本巻十には題詞と左注が離れていて左注は下に付くという、久世切①③④と同様の書き方が認められる。た
だし、元暦校本巻十は作者名、異伝本文を問わず左注すべてを下に合わせて記している。一方、久世切では作者名に
顕著に認められ、久世切⑦に見える異伝本文についてはそうとは判断しがたい。

左注を題詞ではなく下方を基準にすることにどのような意図があったのかは判然としない。例えば、題詞と左注を
明確に区別するための対応の一つとも考えられる。ただし、久世切に見える左注の位置は元暦校本巻十のように徹底
されてはいない。あるいは、久世切の場合、作者名にそれ以外の内容（歌集の表示など）を含む左注や、作者が不明

であることを記した左注については下に合わせて記すという独自の書き方が行われたためかもしれない。ともあれ、現段階では久世切①③④に見える左注の位置は特異な性格であることを指摘するに留める。

六、久世切の歌本文

では、久世切の歌本文の性格はどうであろうか。今までの考察の中で認められたように、久世切の歌本文にも『萬葉集』の真名本文及び現存の次点本『萬葉集』のよみ本文から離れた例が認められる。

〔久世切⑤〕

愴作哥

しかのあまのひとひもおちす
やくしほのからきこひをも
われはするかな

〔萬葉集卷十五（三六五二）・廣瀨本〕

至筑紫館遙望本郷愴作歌四首

之賀能安麻能一日毛於知受也久之保能可良伎孤悲乎母安礼波須流香母

シカノアマノヒトヒモヲチスヤクシホノカラキコヒロモアレハスルカモ

▽古要略類聚鈔同。類聚古集「あれはするかな」（真名本文同）

久世切⑤の歌本文は第五句を「われはするかな」とする。一方、現存の次点本『萬葉集』は廣瀨本、類聚古集、古要略類聚鈔ともに「安礼波」を「アレハ」とよみ、「香母」は類聚古集のみ「かな」とする。現存の次点本『萬葉集』は真名本文に対応したよみであり、久世切⑤は真名本文から乖離したよみであるかわりに平安和歌に馴染みのあるものとなっている。ただし、久世切の歌本文の多くはおおむね真名本文や現存の次点本『萬葉集』のよみ本文と対応する。また、久世切が写本であることもふまえると、久世切⑤の本文は書承の際の変容とも考えられ、「われはするかな」が久世切に見える抄出本『萬葉集』本来の姿であるかどうかについての判断は難しい。

ただし、久世切⑤に見える『萬葉集』からの乖離とは別に、久世切の歌本文が『萬葉集』の真名本文に対応しつつも現存の次点本『萬葉集』のよみ本文とは異なるという、独自性を有する例が三例認められる。

〔久世切④〕

岡本宮御宇天皇幸紀伊國

時哥

あさきりにひちにしころも

ほさすしてひとりやきみか

やまちこゆ覽

右一首作者未審

〔萬葉集卷九（一六六六）・藍紙本（平安時代後期写）〕

岡本宮御宇天皇幸紀伊國時歌二首（一六六五ニアル題詞）

朝霧尔沾尔之衣不干而一哉君之山邊將越

あさきりにぬれにしころもほさすしてひとりやきみかやまちこゆらん

右二首作者未詳

▽伝壬生隆祐筆本、類聚古集、廣瀨本、紀州本よみ本文同

▽類聚古集「山道越良傘」、他本「山道將越」。諸本すべて「作者未詳」

久世切④は、現存の次点本『萬葉集』では諸本揃って「ぬれにし」（第二句）とよむところを「ひちにし」とする。「ヌル」と「ヒツ」は「水が物についてぬれる」という意味では同じである。けれども、現存の次点本『萬葉集』の「沾」のよみを確認すると、一例を除けば（11二五四九「袖副所沾」）すべて「ヌル」とよむ。現存の次点本『萬葉集』で「ヒツ」とよむ漢字は「漬」「湿」に限られる。そのような状況において、「あさきりに」歌の「沾尔之衣」を「ひちにし」とよむことは真名本文から乖離したよみではないが、かなり特殊な例と考えられる。また、左注の「作者未審」の「審」も久世切特有の本文である。『萬葉集』中には「未審姓氏（4七〇九題詞）」「名字未審（3四八三左注）」など用例は認められるものの、当該歌のある巻九には見られない。強いて挙げるならば、巻九・一六六四歌の左注に「右或云本岡本天皇御製。不審正指。因以累載」が当該歌に位置に近い「審」の例で、この左注の影響とも考えられるが、現時点では判然としない。

〔久世切⑥〕

幸芳野離宮時哥

たきのうへのみふねのやまの
あきつへにきなきわたるはたか
こよひとり

〔萬葉集卷九（一七一三）・藍紙本（『校本萬葉集』を参照）〕

幸芳野離宮時歌二首

瀧上乃御舩山從秋津邊尔來鳴度者誰喚兒鳥

たきのうへのみふねのやまのあきつよりきなわたるはたれよふこひとり

▽類聚古集「山のあきつへに」「たれよふこひとり」「誰兒喚子鳥」

▽廣瀨本「ヤマノアキツヨリ」^{城ハニ}「タレヨフコトリ」「誰兒喚鳥」

▽伝壬生隆祐筆本「やまのあきつへに」「たれよふこひとり」（真名本文同）

▽紀州本「ヤマヨリアキツヘニ」「タレヨフコトリ」（真名本文同）

当該歌は現存の次点本『萬葉集』でも第二、三句に異なりが認められるが、この部分では「從」を「の」とよみ、「尔」を「に」とよむ類聚古集や伝壬生隆祐筆本に久世切⑥に近い。ただし、本稿で問題にするのは第五句である。

現存の次点本『萬葉集』がすべて「たれよふこひとり」とするのに対し、久世切⑥のみ「たかこよひとり」とする。ところが、類聚古集、廣瀨本には「誰兒喚（喚）鳥」の漢字列が認められる。そうすると、久世切⑥の本文を原拠である『萬葉集』まで遡るとこれらの伝本と同様の「誰兒喚（喚）鳥」にたどり着き、これをそのままよんだのが久世切⑥の本文ということになる。しかも、「たれ」ではなく「たが（誰のこよひとり）」と「こよひとり」を鳥の名と判断して「誰の子を呼ぶ「こよひとり」であろうか」と理解しているように思われる点、このよみは意識的なもの考えられる。一方、現存の次点本『萬葉集』ではすべて「よふこひとり」とよむが、これは「誰喚兒（兒）鳥」のよみを伝えるか、「よふこひとり」のよみが前提にあつて真名本文が逆であると判断した上でのよみのいづれかが考えられる。久世切には現存の次点本『萬葉集』の真名本文と通ずる一面が見られるのだが、そのよみには違いが認められる。

〔久世切①〕

右一首柿本人丸集

わかせこそきこせのやまとひと
はいへときみもきまさすやま
のなゝらし

詠河

おほきみのみかさのやまの

〔萬葉集卷七（一〇九七）・元曆校本〕

吾勢子乎乞許世山登人者雖云君毛不来益山之名尔有之

わかせこそちこせの山とひとはいへときみもいまさすやまのなゝらし

▽廣瀨本「コチコセヤマト」「ヤマノナニアラシ」

▽類聚古集「ちこせちこせやまと」「やまのなにあらし」

▽紀州本「コチコセヤマト」「ヤマノナニアラシ」

▽古要略類聚鈔「コチコセヤマト」「山ノナ、〇シ」

久世切①に見える歌の第二句「きこせのやまと」も現存の次点本『萬葉集』のよみ本文には認められない。現存の次点本『萬葉集』では第二句の「乞」をすべて「ち」「こ」とよむ。通行の『萬葉集』でも「乞」はコ乙類の萬葉仮名とされている。また、「ち」とあれば「ちこ」（こつちへ来い）となり、「ちこせやま」へと続く初句「わかせこそ」の意義も明確であるが、「きこせのやま」とすると初句「わかせこそ」との連続は先ほどより弱くなる。ただし、久世切①の「きこせ」の「き」は「乞」に相当すると考えられるが、これは誤りでも漢字からの乖離でもない。というのも、「乞」のよみには「コツ（呉音）」と「キツ（漢音）」があるためである。元曆校本のように「こせ」とよむより「きこせ」の方がしっくりきたためであろうか。「き」と「こ」のよみの違いに漢字音が影響していることが考えられるならば、久世切①の本文にはかなり独特なよみ方が反映されていることになる。⁽⁸⁾

久世切の古筆切の数の少なさを考えると、一首中の三例という数をどのように判断するかは難しい。それでも、久世切の歌本文は現存の次点本『萬葉集』のよみと方向性が異なる独自性がうかがえることは確かである。

七、まとめ

久世切はごくわずかししか現存しない抄出本『萬葉集』の古筆切である。この限られた条件を前提として、本稿では久世切の本文及びそこから見える抄出本『萬葉集』のありようについて検討してきた。久世切に見える抄出本『萬葉集』は萬葉歌を仮名書きしそれ以外は『萬葉集』と同じく漢字で表記するスタイルで、その内容はおおむね原拠である『萬葉集』と対応するのだが、なかには平安和歌のありように沿った変容が認められる。ただし、この変容は平安和歌的な要素を強く求めた『萬葉集』の変質化というより、『萬葉集』のあり方への違和感とともに共時的にその表現を変更しても問題ないと判断されたゆえの変容と考えられ、また、この性格は平安時代に成立した『萬葉集』を元とする歌書に見える一つの傾向でもあった。つまり、久世切に見える抄出本『萬葉集』とは、原拠である『萬葉集』の縮小化を意図した抄出本というのが原則であり、それゆえに『萬葉集』に相当近い内容を有する性格となったと考えられる。このように考えられるならば、久世切に見える抄出本『萬葉集』への認識もしくはその書名は「萬葉集」であつたと想像される。また、久世切の歌本文には現存の次点本『萬葉集』と異なる性格が認められ、久世切に見える抄出本『萬葉集』はこれらとは異なる場での成立の可能性を想定しておく必要がある。

それとともに、小松氏は、久世切を調度本として揮毫された一巻の歌書と推定されているが、その性格はあくまで写本であると考えられる。久世切が写本である以上、当然、抄出本『萬葉集』としての成立もそれより遡る。久世切の書写年代である十一世紀後半頃から推定すれば、久世切の原本である抄出本『萬葉集』は平安時代中期には成立していたことが想定される。

本稿では久世切の本文に関する検討を行ったけれども、久世切に関する課題は多く残されている。具体的には、久世切に見える抄出本『萬葉集』を編纂する際の撰歌基準や具体的な成立時期、その後の流布のありよう、また、久世切に見える抄出本『萬葉集』の原拠となった『萬葉集』がいかなるもので、そこからどのような過程を経て抄出本が生成されたのかということも挙げられよう。本稿は、平安時代、確かに存在し萬葉歌享受の一翼を担っていたと考えられる、抄出本『萬葉集』に関する基礎的研究のための布石の一つにすぎない。抄出本『萬葉集』の具体的な実態については様々な観点や資料から考察されることで明らかになるものと考ええる。

〔注〕

(1) 『古筆学大成』には本論で示した六葉の他に、小松氏が久世切の模写本と推定する次の一葉が掲載されている。

神亀元年冬十月五日幸于紀

伊國時山部宿祢赤人哥

わかのうちらにしほみちくれはかたを

(6919)

なみあしへをさしてたつなきわたる

は藤原伊房筆萬葉集抄切そのものであり、一步譲つてもその写しと述べる。藤原伊房筆萬葉集抄切とは高城氏によつて明らかになった新たな古筆切群で、当該切と同じく題詞を漢字で表記し歌を仮名で二行書きするテキストであり、影印による比較ではあるがその筆跡も当該切と極めて近い。高城氏の見解は首肯されよう。ただし、藤原伊房筆萬葉集抄切は久世切と別の歌書ではなく、同系統の抄出本『萬葉集』と考えられることが高城氏や田中氏によつて指摘されている。そうすると、当該切の本文も久世切に存することが推測される（高城氏

『万葉集抄』と『人麿集』との浅からぬ関係―藤原伊房筆「万葉集抄切」を中心として―（『大東書道研究』（第九号）二〇〇一年三月）。田中氏「久世切と『万葉集』抄出本」（『汲古』51号 二〇〇七年）。なお、久世切について、巻三・四二二を有する古筆切の存在が佐佐木信綱著『萬葉集の研究第二 萬葉集古写本の研究』（岩波書店 一九四四年）などに見えるが、現在確認はされていない。

(2) 『万葉集抄と万葉集の錯簡』（『愛知大学文学論叢』21号 一九六一年）。久曾神氏は「この（久世切 稿者注）抄出本が如何なるものであつたかは決しかねるが、少くとも二十巻抄ではなかつたと思はれ、清輔及び顕昭が引用してゐることなどを参照すれば、やはり五巻抄であつたかと思はれる。然しその他にも抄出本が存したかも知れず、なほ今後の研究に俟つべきである」と述べる。久世切が久曾神氏のいう「五巻抄」であつたかどうかは判然としないが、『萬葉集』を大幅に縮小した抄出本として久世切を想定されていることは首肯される。

(3) 下絵萬葉集抄切の詞書「應製」も『萬葉集』の題詞「應詔」を改めたものと考えられる（禁中 仙洞 応製 大納言下などは或応上天皇 万葉店語 近代不用之 自上古迄製也）（八雲御抄・第二・詔書様）（『八雲御抄 伝伏見院筆本』・和泉書院）。

(4) 平安時代後期の成立と考えられる『萬葉集』の注釈書『萬葉集抄』や類聚古集の影響を受けた『古略略類聚鈔』にも同様の例が認められるが、両書には作者名を記す題詞を歌の右下方に記す特異な例も認められる。

(5) 『人麿集』一類本上巻にも本稿で示した伊房切と重なる部分があり、「7一三八八（32）・8一五二五（33）・9一六八五（34）（括弧内は一類本上巻の歌番号。以下同じ）」の順で歌が並ぶ（いずれも『萬葉集』では人麿歌ではない）。『人麿集』一類本上巻と伊房切・久世切との関係は高城氏・田中氏の言及があり拙稿でも述べたことがある。この点についてはさらに検討されるべきことではあるが、このようなことから久世切に見える抄出本『萬葉集』には巻に関する表示がなかつたことが想定される（注1論文及び拙稿『人麿集』の『万

葉集』享受——類本上巻の場合——」（『和歌文学研究』九十五号 二〇〇七年）。

(6) なお、『人麿集』一類本上巻には巻十五歌が四首認められ、「三六〇八（56）・三六〇九（57）・三六一〇（58）・三六一一（59）」の順で並ぶ。久世切がこれと同様の配列であったならば、「むこのうみ」歌は詞書が記されない歌であったと考えられる。その上で、久世切⑤と⑦が久世切の配列として近い位置関係ではないと考えられるならば、「かんさふる」歌が「むこのうみ」歌の前に混入し重複しているという逆のことも考えられる。

(7) 『校本萬葉集』には類聚古集の事項として「但朱ニテ「子」ヲ消セリ」と記す。

(8) 「き」の本文は久世切の他、『人麿集』一類本上巻（22）の「きなれのやまを（書陵部本）」「キコセノヤマヲ（清誉筆本）」「きませのやまを（歌仙歌集本）」と『拾遺和歌集』（818）の「きませの山と」に見える。

【本稿に引用した本文の出典一覧】

藍紙本（『日本名筆選 藍紙本万葉集』・二玄社）、元暦校本（『元暦校本萬葉集』第一冊〜第四冊・勉誠社）、尼崎本（京都帝国大学文学部）、伝壬生隆祐筆本（竹柏會）、廣瀨本（『校本萬葉集』別冊一〜別冊三・岩波書店）、類聚古集（『龍谷大学善本叢書』20・思文閣出版）、下絵萬葉集抄切（『古筆学大成』第十二巻・講談社）、高野切第二種（『日本名筆選3 高野切第二種』・二玄社）、関戸本（『日本名筆選19 関戸本古今集』・二玄社）、『萬葉集』（新日本古典文学大系・岩波書店）。（その他『萬葉集』伝本の本文は『校本萬葉集』（岩波書店）による）

【付記】本稿を発表するにあたり、新たな久世切の翻刻掲載を御許可下さった方々、そして、新たな久世切の存在を御教示下さり翻刻掲載についてもお力添え戴いた田中大士氏に厚く御礼申し上げます。なお、本稿は国文学研究資料館特定研究「万葉集伝本の書写形態の総合的研究」（研究代表者田中大士）による研究成果である。